

コリント人への手紙第一 3章 1-9節 「いつまでも肉の人であってはならない」

小池 宏明 牧師

パウロが記したこの手紙は最初の挨拶から始まり、仲間割れ・分派問題を取り上げている。パウロは1章から2章にかけて、十字架につけられたイエス・キリストこそ神の知恵であることを力強く語り、3章に入ってもう一度分派問題に切り込む。

*キリストにある肉の人

1節「兄弟たち。私はあなたがたに、御霊に属する人に対するようには語りことができず、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように語りました。」本来、救い出されたキリスト者は御霊に満たされて歩む「御霊に属する人」だが、救われたのに御霊に支配されるのではなく「肉に属する人」がいる。ここで言う「肉」とは「罪」あるいは「罪ある体」を意味する。「肉に属する人」とは、罪の性質に支配されて世の中のさまざまな誘惑に負けてしまう人のこと。救われたはずのキリスト者が、救われる前と同じようなことを行っていると言うのだ。分派や仲間割れが起きていることは、未だに罪の支配の中で歩んでいる証拠なのだ。いつの時代も、どこでも起きているねたみや争いが、教会の中でも起きているなら、いくら神の知恵を語っても、この世の価値観で生きている人々と変わらない「ただの人」でしかない。(3、4節)

*パウロもアポロも神の奉仕者

パウロは、「私はパウロにつく」とか「私はアポロに」とか言っている信徒たちに明言している。5節「アポロとは何なのでしょう。パウロとは何なのでしょう。あなたがたが信じるために用いられた奉仕者であって、主がそれぞれに与えられたとおりのことをしたのです。」パウロもアポロも、神様が与えられた使命を实践する奉仕者の一人に過ぎない。二人は神と人々に仕える奉仕者であり、神のために働く同労者である。(9節)

*成長させてくださる神

2節「私はあなたがたには乳を飲ませ、固い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。」パウロの言葉は実に厳しい。固い食物とは御ことばを聴いて実践するために必要なことを指している。救い出された私たちは、肉の人から御霊に属する人を目指しているだろうか？ 福音を受け入れた幼子クリスチャンは御ことばを聞くだけではなく、実践しながら成長することが求められている。私たちは、成長させて下さる神様に期待しながら、固い食物もよくそしゃくし、忍耐深く歩む者でありたい。